

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）

大学院学生研究

2 0 2 5 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学 研究科 キリスト教学 専攻		
研究代表者 (2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏 名
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年		辻 田 青
指導教員	所属部局・職名		氏 名
	文学部・教授		加 藤 磨 珠 枝
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	近代日本の和風教会建築研究——カトリックの事例を中心に		
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏 名
研究期間	2 0 2 5 年度		
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
本研究は、近代日本（1860 年代から 1940 年代前半）に建設されたカトリックの教会建築、とりわけ和風の教会堂群を対象に、それらの建築的・美術的特徴、および建設に際した宗教的背景について考察するものである。本研究ではまず現地調査を実施したのち、各教会堂の建築意匠の分析と比較を行った。加えて、主に教会所蔵資料や宣教側資料などを対象とした文献調査を基に、教会堂に和風建築が選択された要因について検討した。中でも宗教的理念が実際の建築にどう反映されたのかに注目し、これら建築群の近代日本におけるカトリックの宣教史、ひいては日本キリスト教史上の意義を明らかにすることを目指した。
キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[カトリック] [教会建築] [近代和風建築]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

1. 研究の背景・目的・方法の概要

本研究では、近代日本(1860年代から1940年代前半)に建設されたカトリックの教会建築のうち、とりわけ和風建築の事例に注目する。それらの建築的・美術的特徴の比較分析、および建設に際した宗教的背景の検討を通し、近代日本におけるカトリック宣教史、ひいてはキリスト教史上の意義を明らかにすることを目的とした。

カトリックの事例に限らず、近代日本の和風教会建築については、これまで学術的な注目はあまりされてこなかった。加えて、先行研究では、個別事例に対する文化財保存の観点からの調査報告が主流となっており、複数事例の詳細な比較に基づく横断的な研究は未だ十分に蓄積されていない。とりわけ、それら建築群に共有される建築的・美術的特徴や、そこに内在する宗教的側面については十分に検討されていない。

本研究では、第一に、対象とした教会堂の現地調査を実施し、後の分析のための写真撮影、並びに図面や教会所蔵資料などの基礎資料の収集を行った。第二に、各事例の建築的・美術的特徴の分析と並行して、建設に際した背景について、主として教会記念誌などの教会所蔵資料や宣教側資料を基に文献調査を行った。第三に、各事例の建築意匠の比較分析を通し、時代や地域、会派を超えて共有される共通点ないし相違点を抽出した。第四に、文献資料上の記述を踏まえ、それらの意匠において宗教的理念がどのような形で、またどのようにして反映されたのかを検討した。

具体的な研究対象は、大明寺聖パウロ教会堂(愛知県、1879年)、カトリック主税町教会(愛知県、1904年)、瀬留カトリック教会(鹿児島県、1908年)、津和野カトリック教会(島根県、1931年)、奈良天主堂(奈良県、1932年、現存せず)、カトリック片瀬教会(神奈川県、1939年)、カトリック豊中教会(大阪府、1939年)、大津カトリック教会(滋賀県、1940年)の8件とした。なお、本研究課題においては、研究代表者のこれまでの研究にて未調査であった大津カトリック教会(9月)、カトリック主税町教会(11月)、津和野カトリック教会(11月)、瀬留カトリック教会(12月)の4件を対象に現地調査を行った。以下は、本研究にて得られた主要な成果2点の概要である。

2. 主な研究成果**1) 三廊式平面を採用した教会堂の内部立面構成について**

建築意匠の比較分析を通して、対象の教会堂のうち三廊式平面を採用した事例6件、擬似的な三廊式平面の様相を呈する事例1件の内部立面に注目した。6件の教会堂は和風意匠を採用しながらも三廊式という西洋の教会建築に典型的な平面形式を採っており、身廊の立面構成に注目すると、以下の二類型に大きく分類できた。

第一に、柱・貫などの軸組とその上部の小壁による二層構成である。この形式は、瀬留教会、主税町教会(戦後に側廊が増築されたため、厳密に言えば三廊式教会堂としては近代の作例ではない)、片瀬教会、豊中教会に見られ、日本の伝統的な木造建築における一般的な構成を踏襲している。列柱はアーチではないもののアーケードとして機能し、加えて小壁を設けることで、より明確な身廊と側廊の空間的区分を実現させており、日本的な建築意匠・構造の枠組みの中で、三廊式という教会建築における伝統的な形式が成立している。

第二に、アーケードを採用する事例であり、大明寺聖パウロ教会堂と大津教会が該当する。これら2件では外観を和風意匠とする点でも共通し、内部立面の構成にはトリフォリウムなどは見られないもののアーケードを採用することで内観は外観に反し西洋的な意匠となる。これは内部意匠に対し西洋的なものを志向した結果、アーケードが採用されたと考えられる。さらに、大津教会を除く5件では、教会堂本体の屋根は単一の大屋根であるが、身廊と側廊の天井高に差を有し(前者の方が高い)、バシリカの空間の再現をも見出せる。

加えて、平面は単廊式を採るものの、擬似的な三廊式の様相を呈する事例として、津和野教会にも注目した。外観はゴシック調であるものの、内部では畳敷きを採用しており、天井は中央と左右で高低差を有する折上天井とする。列柱は設けないものの小壁を垂下させ、加えて畳を左右に分割して配置することにより、あたかも身廊と側廊の区画が空間的に再現されている。福島氏によれば、津和野教会の設計者である川原正治は、彼が津和野教会よりも前に設

研究成果の概要 (つづき)

計した門司教会堂においてもこうした天井形式を採用しており、「天井形態によって三廊式を空間的に表現」していると指摘する[1]。なお、天井の格間が矩形ではあるものの格天井であり、教会所蔵の設計図面を確認する限り、設計時点で設置が想定されていた畳の存在と合わせて、日本的な内部空間を意図したように推察される。

なお、こうした建築に反映された宗教的理念について、片瀬教会、豊中教会、大津教会に関しては、それぞれ建設を主導したパリ外国宣教会の宣教師 J. B. A. シャンボン、J. B. カスタニエ、メリノール宣教会の P. J. バーンが日本における適応主義的な意向を有していたこと、教会堂に伝統的な建築を採用することによる宣教上の有効性を意識していたことが伝えられている [2][3][4]。

以上のように、これらの教会堂群は、西洋の教会建築の伝統と日本的な建築文化とが相互に影響し合う中で生み出されたものだと解され、近代日本における三廊式教会堂の受容と変容を示す具体的事例として位置づけられる。さらに一部では、宣教師による宣教上の意向が建築の方向性、すなわち教会堂における和風建築の採用を促したことが確認された。ここでの成果を(様式 3)の【A】にて発表した。

2) 社寺建築要素を装飾的に転用した祭壇および内陣空間について

祭壇において社寺建築要素を装飾的に転用、ないしそれを中心とした内陣空間に神社仏閣の内陣に見られる要素を転用した事例に注目した。具体的には、奈良天主堂、豊中教会、そして大津教会の建設にも関与したメリノール宣教会の P. J. バーン神父が製作を監督(1935 年頃?)した祭壇および内陣の 3 点である。

いずれの祭壇も、社寺建築に見られる組物の一種である出三斗などの建築要素を装飾する点で共通する。とりわけ奈良天主堂と豊中教会に関しては、和風を基調とした内部空間との意匠的連関が見出される。また、出三斗の装飾については、例えば仏教寺院における須弥壇などを流用するのではなく、西欧における祭壇装飾の伝統(建築的モチーフの付加)を背景として、そこに日本建築の要素が選択された可能性が指摘できる。

さらに注目すべきは、こうした祭壇を中心とした内陣に、神社仏閣の内陣に見られる要素が認められる点である。これは豊中教会の内陣における天井形式(折上格天井の採用)や壁面構成に、バーンの作例においては、祭壇上の聖櫃・燭台・天蓋の意匠は仏教的なものに着想を得ており、かつ祭壇・聖櫃・天蓋は仏教寺院でいうところの須弥壇・厨子ないし宮殿・人天蓋にそれぞれ配置的に対応している。

以上のように、これらの祭壇やそれを中心とした内陣空間には神社仏閣の要素からの転用が確認されるが、それらに紐づく特有の宗教性ではなく、むしろ普遍的な宗教的感受性を喚起させるため、ないしは内陣が宗教的に重要な領域であることを顕示するために取り入れたのだと考えられる。加えて、これらは単純な転用ではなく、キリスト教的象徴性や機能に適合するように造形的に改変されている。したがって、これらは神社仏閣の意匠的要素から代替可能なものを選択したうえで、西洋的な意匠を踏襲することなくキリスト教的純粋性をも保持した、いわば造形的な翻訳の結果であるといえる。バーンの作例に関しては、彼は祭壇に対する特別な言及はしていないものの、日本の教会建築に社寺建築要素を取り入れることを奨励し、日本における伝統的な芸術が宣教において役立つとしている [5]。この考えは彼が建設を主導した大津教会において表面化されたが、ここにおいても大いに反映されたのではないだろうか。ここでの成果を(様式 3)の【B】にて発表した。

以上が、本年度の研究によって得られた主な成果である。本研究を通して、近代日本におけるカトリックの和風教会建築は、西洋の教会建築の単純な移入ではなく、日本の建築文化・宗教文化との相互作用の中で展開されたものであることが具体的に示された。加えて、一部では宣教師による宣教上の意向が教会堂の建築的・美術的側面に反映されていることが確認され、教会建築と宣教姿勢の連関が明らかになった。

【参考文献】[1] 福島綾子、2025、「カトリック福岡教区における建設事業の研究(その 3)——門司教会堂の建設」『日本建築学会計画系論文集』第 90 巻、第 832 号、1320 頁。[2] 赤羽根万吉、1972-1974、「片瀬教会のおいたち」『からし種』1973 年 8 月号。[3] 再宣教 150 周年企画委員会記念誌編集チーム編、2020、『カトリック大阪大司教区 再宣教 150 年記念誌 1868 年-2018 年』カトリック大阪大司教区、96 頁。[4] 三俣俊二、1990、「キリシタン時代の近江から大津教会の設立まで」五十周年記念誌編集委員会編『湖畔の聖母——大津カトリック教会献堂 50 周年記念誌』大津カトリック教会、29 頁。[5] 同上。

※ この(様式 2)に記入の成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

該当なし

② 図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

該当なし

④ その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

【A】辻田青、2026、「近代日本のカトリックにおける三廊式の和風教会建築」立教大学大学院文学研究科／キリスト教学研究科・院生研究発表会、立教大学 池袋キャンパス、2026年1月22日。

【B】辻田青、2026、「昭和初期のカトリックの祭壇にみられる社寺建築要素の装飾的転用」2025年度日本基督教学会関東支部会、関東学院大学 横浜・金沢八景キャンパス、2026年3月17日。